

上方文藝研究

第12号

- 日本女子大学本『大和八条村孝子聞書』について 福田安典 (1)
- 享和元年十二月の大田南畝 一新出順宜宛書簡を手がかりに— 神谷勝広 (7)
- 京伝黄表紙と「夢応の鯉魚」 有澤知世 (14)
- 吉田四郎右衛門出版年表 加藤弓枝 (24)
- 林鮎主年譜稿(下) —享和から天保まで— 高松亮太 (38)
- 長岡京市正木彰家文書の詩稿について(三) 新稲法子 (53)
- 連載 上方文藝への招待 (4)
- 韓国の大学傘下日本研究所ホームページにおける 康 盛国 (65)
- 日本の歴史的典籍画像データベースへのリンク現況

上方文藝研究会

長岡京市正木彰家文書の詩稿について (三)

新 稻 法 子

本誌10号、11号において、京都府長岡京市の正木彰家文書の詩稿について調査した内容を報告してきた(注1)。正木彰家文書の中でも詩稿については数種が一綴になったものが多く、この一綴が一冊として目録に掲載されている。拙稿では新たに一種ずつ番号を割り振り、年月日や批閲者などの情報を加え、その実態がわかるようにした。

今回調査したのはこれに続く請求番号1-7-10-1-7-17である。10号で報告した請求番号1-7-11-1-7-4、11号で報告した1-7-5-1-7-9と同じく、それぞれが一つの大袋にまとめられている。詩稿のうち詩社に関するものはこの三袋で、残りは正木安左衛門(号舜山、以下舜山と記す)個人のものである。

これまで詩稿の情報を示すと同時に、10号では正木舜山と共研吟社・嚶求吟社について紹介し、指導者と添削の実態についての概要を、11号では詩社の活動時期とこれまで不明だった盟主について明らかにした。今回は乙訓漢詩壇の人々と活動内容を中心に取り上げ、

本業の余暇に文雅を楽しむ人々の実態を追うことで調査のまとめをしたい。

1 乙訓漢詩壇以前

そもそもなぜ乙訓地方で漢詩が盛んになったのであろうか。梁川星巖に学んだ宇田栗園がその牽引役であったことはいうまでもないが、元来この地方には漢詩壇が形成されるだけの背景があった。

幕末に栗園が漢詩を広める以前から、乙訓は文化的な地方であった。漢詩の縁でいうと、平安時代にまで溯れば嵯峨天皇の河陽離宮があり、勅選詩集に収められたいくつかの作品の舞台となっている。戦国時代、連歌師の山崎宗鑑がその屋敷對月庵を構えた大山崎も乙訓地方であり、三条西実枝に古今伝授を受けた細川幽齋は、長岡に知行を持っていた。

近世になってからは、京大坂間に位置する乙訓地方は交通の便も

あり栄えた。特に西国街道沿いの宿場町であった向日町は独自の文化サロンを形成していた。向日神社の神官であった六人部是香(号鶴舎)は文化面で大きな影響力を持ち、乙訓の地に国学と和歌を広めた。是香に学んだ鳥羽屋九代目九郎兵衛(号桜居)は代々絞油業を営んでいたが、自らが文雅を嗜むだけでなく、店の奉公人にも奨励するような人物であった。京都に出て歌人となった岡崎秀雄は鳥羽屋九郎兵衛の門人の一人である。このように、京都にもその名を知られていた六人部是香・鳥羽屋九郎兵衛の二人を中心として、近世後期には乙訓文化サロンが形成されていたのである。

「平安人物誌」に倣って作られた「向日里人物志」は文政八年の日付が記されている写本で、当時の乙訓文化サロンの実態が窺える資料である(注2)。この「向日里人物志」には、「和歌」「連歌」「俳諧」などの和文学と比較すると少ないながらも「儒家」や「詩」の分類がある。「詩」の項に収められているのは

宇田耕 寫(周盛) 宇田善繼 村井秀胤
 寫(厚一郎) 僧(金林寺) 釈素峯 円(明寿院)

の八名であるが、うち二名を宇田氏が占めている。

このように乙訓地方は元來文化的に非常に豊かな状況にあった。幕末に突然、宇田栗園が現れて漢詩壇が形成されたのではなく、その下地は既に醸成されていたのである。

2 乙訓漢詩壇の詩人たち

乙訓漢詩壇の全容をつかむのに基本的な資料は「西岡風雅」(注3)である。11号で紹介した同書は、明治十年代までの乙訓漢詩壇の集大成であるといえる。題簽・魚尾題・内題共に「西岡風雅」とあり、縦一九・四cm横二二・〇cm、銅版印刷本、序・跋共に明治十五年。版元の記載はなく、私家版として関係者に配布されたのだと考えられる。詩体は七言絶句が多い。例言に「集中諸家多西岡人也間有自他方來寓者及一二既亡者而不復分別焉 集中諸家、多くは西岡人なり。間他方自り來り寓する者、及び一二既に亡せし者有り。而れども復た分別せず」とあるように、乙訓地方が本籍でないものや、時代を遡る作者もいるが、おおむねこの「西岡風雅」に掲載された詩人が、当時の乙訓漢詩壇を形成していたと見なしてよいであろう。その作者は年齢順に次の通り記されている。

宇田振振齋 宇田秋嶺 佐藤玩龍 岡本棠陰 上羽西樵
 正木崧山 宇田雪窓 宇田研谷 藤井紫山 八山碧澗
 秋山強堂 樋口敬軒 森本桑泉 岡本大川

振振齋、秋嶺、雪窓、研谷と三割近くが宇田家で占められており、その影響力の大きさが窺える。

日浅忠行氏・吉野(旧姓宇田)容子両氏によると、宇田振振齋は「向日里人物志」にも収録されている宇田善繼(一八六二年没、享年五二)、儒医であり、地元の指導的な役割の人物であった。

宇田秋嶺（一九〇一年没）は同じく儒医の宇田退蔵、貞造の三男で栗園にとっては兄に当たる。今里村の正木嶺山に漢学を教えたのはこの秋嶺である。

宇田研谷（一九〇五年没）は秋嶺の長男の郁太郎である（注4）。

振振斎は『西岡風雅』刊行時より二十年ほど前に亡くなっているが、栗園の代で花開いた乙訓漢詩壇の濫觴として作品を収録したのであろう。「向日里人物志」と『西岡風雅』の両方にその名を残した振振斎は、近世後期と明治の乙訓文化を繋ぐ人物であると言える。ちなみに振振斎、秋嶺は宇田家の中でも神足宇田家（秋嶺は後に貞造と長法寺村へ移住）であり、貞造の建てた屋敷は長岡京市神足に現存する。

『西岡風雅』にその作品を収められた人々は、ほとんどが詩人として全国的に名を知られているというわけではなかった。文学史的には地方詩壇のいわゆる群小詩人の一例と位置づけられる。

『西岡風雅』以降も同様で、乙訓漢詩壇の人々のうちある者は村長や庄屋として地元で、ある者は議員として政治の世界で活躍した。彼らにとって詩作は本業ではないのである。

しかし、その作品には地元に対する誇りと愛情が窺える佳品が少なくない。たとえば正木嶺山の「春郊散策」。

旗影翩翩閃暖風 旗影 翩翩 暖風に閃き
酒家門外夕陽紅 酒家 門外 夕陽紅し
花明柳暗春如畫 花明 柳暗 春画の如し
人在放翁詩句中 人は在り放翁詩句の中

前半で杜牧が詠んだ美しく豊かな江南と乙訓の風景を重ね合わせつつ、全体は南宋の田園詩の趣を持つ。詩人、嶺山はまるで陸游の詠んだ田園四時雜興の世界にいるようだといふのである。

岡本棠陰の「下淀川 淀川を下る」。

秋風挂席下長流 秋風 挂席 長流を下り
北客南人共一舟 北客 南人 共に一舟
日落浪華城已近 日落ち浪華城已に近く
餘霞紅映水邊樓 余霞 紅に映ゆ 水辺の楼

京大坂を結ぶ淀川の三十石船での作であろう。大坂の町に到着するころには日が暮れ、夕陽に建物——おそらく料亭などであろう——が照り映えている。

そして『西岡風雅』の詩人たちの中では最年少である岡本大川の「菅廟梅花」。

馥郁寒梅綴素英 馥郁 寒梅 素英綴る
萬株如雪映朱甍 万株 雪の如く朱甍に映ゆ
暫來花底悄而立 暫く来りて 花底 悄として立ち
想見當年泣月明 想ひ見る当年月明に泣くを

菅廟とはもちろん、菅原道真が幾たびも訪れ、太宰府左遷の際も立ち寄った長岡天満宮のことである。

『西岡風雅』の跋文は、淡路出身で京都で活躍した儒者、林双橋（一

八二八〜八九六)によるものであるが、乙訓地方を陶淵明の世界を
体現しているような土地だと称え、

西岡古帝都之地而茂林修竹神祠佛刹春花之艶秋葉之美處々皆是

西岡は古の帝都の地にして茂林修竹、神祠仏刹、春花の艶、秋
葉の美、処々皆是なり。

と述べている。

そもそも乙訓郡は山城国に属し、文化的にも京都の圧倒的な影響
を受けている。しかし、既に述べたように由緒ある神社仏閣と風光
明媚な自然が共に存在し、何よりも一時的にせよ長岡京という都が
置かれたという事実が、他の京都周辺の地域と一線を画す、乙訓漢
詩壇の人々のアイデンティティだったのである。林双橋の跋文は
乙訓の人たちのその辺りの矜持をよく理解して記したものと見え
る。

3 乙訓漢詩壇の時代

長い伝統のある土地柄とはいえ、明治維新による大きな変化は乙
訓地方の文化にも少なからず影響を与えたはずである。漢詩に関し
ては、多分に近世的であったであろう栗園の漢詩サークルと、天保
生まれで青年期に時代の変革を体験した巖山たちの時社とでは、そ
の雰囲気は多少なりとも異なっていたに違いない。

樋口家や小山家には、「今里村至親三省組血判盟約」が今に伝わる。

これは、正木安左衛門・能勢利左衛門・渋谷宗逸・小山宇右衛門・
樋口八郎右衛門の五人が明治二年九月に作成したもので、安左衛門
が巖山、八郎右衛門は「西岡風雅」にもその名が見える樋口敬軒。
能勢、樋口は後に府会議員になっている。巖山はこのとき二十九歳
であった。その内容は

盟約

輓今

御一新太政之御仁典厚ク奉懃載候ニ付而ハ

是まで約治致し並々件々再ひ添減し

旧慣を除去し新良を主用し子々

孫々爾至るまで益組局相互爾親和交密

致し勤 王を要的し公私の議論を

辨別すへき事ニ候附而ハ親友組と唱号シ

居候へ共其旧名を一洗至親三省組と

相改メ左之条件固く保持致し畢事

条件左之通

と始まり、十二の条件が記されている。第一の条件としてあげられ
ているのは五榜の掲示第一札にある五倫を三省することであり、至
親三省組という命名の由来を示す。第二、第三の条件は

一 職業を要務し余力之節ハ文学勉強

研□一致事

一 博奕諸勝負及ヒ酒暴□蕩絵而

邪修等固ク謹慎し正廉之作行
肝要するへき事

附 不当之驕奢致ス間敷事

(注5)

と仕事に励み余力があれば文学を勉強しよう勧め、博打や酒を禁じている。同様のことは、近世後期に乙訓と同じく街道筋の町として栄えた神辺に麻塾を開いた菅茶山が「郷塾取立に關する書簡」に於いて「神辺と申処ことの外悪風俗之処にて、村にて歴々など申てはかまありき候人までみな博徒二候」といい、「わたくしなどとはたち計迄ハはくちもち富第一をもち候ほと二候へハ、酒色などの悪行ハいふことをまたす候……其中ニふとはいかい発句てふ物をいたしおほへ候、それよりうた詩などとすこしツ、読書にむかひ候」と記したように、俳諧・和歌・詩などの文芸に励むことが享樂的な暮らしから脱却するのに有効だととらえていたことを思い起こさせる。とはいえ、血判を押すという激しさは、明治になってまだ二年という荒々しい時代を反映しているのだろう。

乙訓漢詩壇の中心的な人物の多くは、衆議院議員となった正木鎗山のような政治家や、村長や庄屋などの指導的立場の人々だった。彼らが団結して互いを律し合っていたことがこの血判状から窺える。ここでいう余力に学ぶべき文学として選ばれたのが、和歌でも俳諧でもなく、漢詩だったのである。

鎗山たちが至親三省組を結成してから数年、明治十年代の乙訓地方では学習結社や集書社設立の動きもあつたことがわかっている。これらは現在の図書館に当たたる施設である。

明治十六年二月、今里村の能勢清左エ門・久我村の野村宗竹・上羽村の林新右衛門・開田村（かいてん）の西小路利兵衛が長岡天満宮の連歌所で西岡（にしのおか）学会という学習結社を結成することを府知事に届けている。また、有志者の名前などは不明であるが、今里村でも同年十一月に集書・閲覧のための集書社の設立趣意書を届け出ている（注6）。自由民権運動が広がり、国会の開設に向けて乙訓地方でも人々の学問に向ける関心が高まっていた。維新で断絶した漢詩の会が共研吟社として復活し、「西岡風雅」が出版されたのは、ちょうどこの時期だったのである。

4 活動の諸相

乙訓漢詩壇の人々は、具体的にはどのように活動していたのであろうか。

宇田栗園が仲間や弟子と詩作を楽しんでいた幕末の文久・元治年間（一八六一―一八六五）は、「西岡風雅」序に「毎月一たび集ひ、吟詠に従事し、仍ち家君に正を取る」とあることから、月に一度詩会を持っていたことがわかる。これは例えば、大坂で明和二年（一七六五）に結成された片山北海（一七三三―九〇）を盟主とする混沌会が、「毎月既望」つまり月に一度十六日に集まったように、近世以来の詩会のごくふつうのペースであると考えられる。

しかし、近代になると事情は変わってくる。明治三十五年に結成された嚶求吟社については、三十五年五月から翌年一月の活動を詳細に記録した「嚶求吟社紀事」によると、六月と十月が一回だった

のを除くと月二回詩会を行っているのである。

先号で稿者は「共研吟社」と記された詩稿は明治三十五年のものを最後に途絶えている」と書いたが、今回の調査で三十六・三十七年の詩稿で「共研吟社」と記されているものがあつたので訂正したい。すなわち、盟主栗園を失つた後も共研吟社の活動は続いており、嚶求吟社は盟主である櫻井桂村を招いて行われていたが、同時に共研吟社の詩稿の添削をも桂村に依頼していたと推測されるのである。それも17710が明治三十六年一月、17711が二月、17712①が仲春とあるからおそらく三月、17712②が四月……と、毎月のように詩稿が現存するので、嚶求吟社の活動と合わせると、乙訓地方では月に三回は詩会が開かれていた、少なくとも詩稿を募集していたということになる。人々の旺盛な創作欲が窺える。

詩会が行われた場所は、嚶求吟社の場合正木聳山が「嚶求吟社紀事」で膳を取つたことなどを詳細に記録していることから、基本的には聳山の自宅だったと考えるのが自然である。しかしそれとは別に、例えば「光明寺賞楓」(1773①)や「長岡雨中寒梅」(1773②)といった分韻が光明寺や長岡天満宮で詠んだと推測されるように、近隣の吟行もしばしば行われたようである。「糺林啼鵲」(1771②)「鴨川秋柳」(1771④)などの詩題もあるので、時には京都まで繰り出したことも大いに考えられる。

次に詩会の参加者について述べよう。「西岡風雅」に収録された十四名のうち、既に逝去していた宇田振振斎は当然として、正木聳山より年長の宇田秋嶺・佐藤玩龍・岡本榮陰・上羽西樵の四名はこ

れまで調査した詩稿にその名を残していない。聳山は当時四十年代前半だが、上の世代の人々は「西岡風雅」が上梓された時点で作詩活動から引退していたことが推測される。聳山より年下の藤井紫山は1771④を最後に作品が途切れているが、1773②に「弔亡友紫山君墓 亡友紫山君の墓を弔す」という題で聳山・耕雲・桑泉・柏寓が詩を寄せているので亡くなつていったことがわかる。「西岡風雅」では最年少の岡本大川は1771③を最後に作品が見られないが、明治十三年の1771④に「寄懐社友岡本獺川君在但州城崎懐ひを社友岡本獺川君の但州城崎に在るに寄す」という分韻があるので、乙訓を離れたのであろう。多くの社友の年齢を特定するのは困難だが、幕末からの乙訓漢詩壇の集大成である「西岡風雅」の時代を経て、明治十年代の乙訓漢詩壇は聳山等四十代中心に世代交代していたととらえてよいだろう。

調査した詩稿で名前を確認できるのは五十三名(別号など同一人物の可能性のある場合も計上した)(表9)であるが、出席者がその場で詩を詠む席題の署名を確認してみると、少ないときで四、五人、多いときで十一、十二人程度、最大で十四人である。そしてその活動の仕方にも実に様々である。

共研吟社の詩稿や「嚶求吟社紀事」の記録から、一回の詩会は前もって与えられた詩題で作品を用意してくる宿題(課題)と、その場で韻を分かつたなどして即席で詠む席題からなることがわかるが、例えば中山耕雲は1774④、1774⑤、1775⑥に宿題の題詠のみ収められており、回覧の署名がある1774④、1774⑤にその名が見える。おそらく当日は都合が悪く出席できなかったので宿題だけ提出し、添削を受け、回覧で他の社友の作品も読ん

〔表1〕【請求番号1-7-10】 寸法24.3×16.7センチ（一綴。便宜上、最大のものを示した。）

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	明治三十六年一月/ 共研吟社詩稿／乞清 風	明治三十六年	四丁	櫻井桂村	天地人	櫻井桂村が住まいを「城南千本 寓居」と記している 回覧の覚え書きあり

〔表2〕【請求番号1-7-11】 寸法23.5×16.0

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	共研吟社二月詩稿/ 會主伏乞／清風	明治三十六年	六丁	櫻井桂村	天地人	回覧の覚え書きあり

〔表3〕【請求番号1-7-12】 寸法28.2×20.0

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
①	共研吟社詩稿	明治三十六年	六丁	櫻井桂村	天地人	櫻井桂村が「關於妙喜庵寺窓下」 と記している 回覧の覚え書きあり
②	共研吟社詩稿	明治三十六年	四丁	櫻井桂村	天地人	

〔表4〕【請求番号1-7-13】 寸法26.5×19.4

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	詩稿／共研吟社／伏 乞 大正	明治三十六年	四丁	櫻井桂村	天地人	

〔表5〕【請求番号1-7-14】 寸法23.8×16.3

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	なし。内題「共研吟 社課題」	明治三十七年	二丁	櫻井桂村	なし	

〔表6〕【請求番号1-7-15】 寸法25.5×17.7

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	なし。内題「共研吟 社課題」	明治三十七年九月	十丁	櫻井桂村 (最終丁 のみ)	なし	清書前の草稿と兼書

〔表7〕【請求番号1-7-16】 寸法24.5×16.5

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	なし	年次不明	一丁、 二枚、 一丁、 二枚	櫻井桂村	なし	嵯山の詩をまとめたもの

〔表8〕【請求番号1-7-17】 寸法25.3×18.1 (最大)

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
①	なし	不明	一丁	なし		嵯山個人の詩稿類 「赴西山金蔵寺途上口号」など
②	なし	不明	一枚	なし		「夏日游長岡」
③	なし	不明	一丁	なし		「宗祖円光大師七百年忌辰謹賦 奉表追慕之意」
④	正木嵯山 探勝襟吟	不明	七丁	なし		赤い罫線の用紙 「宸題」など
⑤	なし	不明	二丁	なし		紺の罫線の用紙 「西山観楓途上口占」
⑥	なし	不明	一丁	なし		赤い罫線の用紙 「看梅併三宝院境内墓」など
⑦	なし	不明	二丁	なし		
⑧	なし	不明	一丁、 一枚	なし		ハترون紙「途上口号」など

〔表9〕共研吟社・嚶求吟社参加者 (五十音順)

行	雅号
【ア行】	益軒 煙汀
【カ行】	快哉 霞山 月笑 寒月 玩龍 (佐藤) 強堂 (秋山) 玉鈞 (鶴岡) 敬軒 (樋口) 研谷 (宇田) 犬川 (岡本) 玄堂 耕雲 (中山) 耕紅 (中山) 泉山 (広小路) 香雪 (津田) 浩然 孤舟
【サ行】	三溪 紫山 (藤井) 慈峰 (六車) 秋陰 (西田) 秋園 (西田) 秋嶺 (宇田) 春畦 (稻本) 蕉雨 嵯山 (正木) 振振斎 (宇田) 星渠 西樵 (上羽) 青龍 雪窓 (宇田) 桑陰 (植田) 桑泉 (森本) 蘇水
【タ行】	竹屋 (荒堀) 鉄片 (川崎) 天涯 棠陰 (岡本) 東海 (石原) 冬冬
【ナ行】	南嶺 (武田)
【ハ行】	柏宇 (岡本) 柏寓 (岡本) 飄瓦 (川崎) 碧澗 (八山)
【ラ行】	柳亭 (三谷)
【姓のみ】	((岡本)) ((西野)) ((渡邊))
【未詳】	□仙 □□ (虫損)

でいたのであろう。耕雲の熱心さが窺える。

反対に、177-5④、177-5⑤、177-6の三回参加した六車慈峰が、その三回のうち二回は宿題をせず席題だけ詠んでいるように、宿題には熱心ではないが会にやってくるのでその場で席題を詠んでいる人物もいる。腕に覚えのある者が飛び入り参加したような印象がある。

また、宇田雪窓の177-4④の場合のように、宿題も提出せず当日も欠席だが、回覧には加わって読んでいることもある。

一、二度しか参加していない者もかなりいるが、参加回数のない者の中には、乙訓地方在住でないがゲストとして加わったという場合も含まれているかもしれない。

このように詩稿から参加状況を追っていくと、各人が自らの事情に合わせてそれぞれ自由な形で参加していることが窺える。

これを嚶求吟社に限定して見てみると、

森本桑泉 正木聿山 植田桑陰 樋口敬軒
中山耕雲 林 西田秋園

の七名が「嚶求吟社紀事」に名前を記されており、林以外は共研吟社の常連である。この他「嚶求吟社紀事」には止水・閑水・□州という名前らしきものも見える。「西岡風雅」に作品を収録されているのは桑泉・聿山・敬軒の三人で、六十代に入った聿山が最年長である。林は明治十六年に今里村の能勢清左エ門らと西岡学会を結成した上羽村の林新右衛門であろうか。

嚶求吟社については、「嚶求吟社紀事」で確認できる出席者数は平均四人で共研吟社よりかなり少ない。このことは、気心の知れた仲間と自分の好きな形で参加して楽しむ共研吟社と、櫻井桂村という盟主を囲んで行う嚶求吟社の性質の違いを表しているといえる。添削だけを依頼している共研吟社の方が当然会費も安くついたであろう。嚶求吟社にも桂村と宴席を共にする以外の形で参加していた社友がいた可能性はあるが。

いずれにしても、指導者との距離が近い嚶求吟社は詩会の出席率も高く、作詩に関しても少数精鋭といえる。

ところで177-15は他のものと異なり、各人の詩稿が清書されなのまま綴じられている。一枚目右下に朱で、

月下看劍 宿題 秋林覚句 席題 九月四日 廿一日囁 會主
聿山
海村 聿山 耕雲 春窓 春畦 桑泉 桑陰 柳屋 溪雲 九人

と書き込まれていることから、宿題・席題と作者がわかる。最終丁の春窓のみ櫻井桂村の添削がある。

興味深いことは、177-15には詩会に欠席した川崎鉄片から正木聿山に宛てた葉書が一緒に綴じられていることである。

鉄片は大山崎の川崎安之助（一八六七—一九三〇）であり、大山崎村長、京都府町村会長、京都府会議員を務めた。漢詩をよくし、共研吟社の詩稿にはしばしばその名前が見え、没後「鉄片遺稿」も上

梓されている。「乙訓郡誌」の「政界変遷史」は「青年の頃から天王山に登りて草稿片手に演説の練習を為した後年これが非常な役に立ち進り出る熱弁は聴者をして肯定せしむるに充分であった、謹言の君子にして郡内古今稀なる人格者で今でも川崎党の崇拝者が近畿にある」とその人柄をいきいきと伝えている(注7)。

177-16の詩稿には聳山の作であろうか、「送川崎氏 川崎氏を送る」という作がある。

送君併又送君詩 君を送り併せて又君が詩を送る
啼鳥落花情轉悲 啼鳥 落花 情 転た悲し
今後嚶求吟社会 今後 嚶求吟社会
柳当□□両三枝 柳当□□両三枝

『嚶求吟社紀事』には鉄片の名前は出て来ないが、転句から、聳山が鉄片を社友と見なしていたことがわかる。

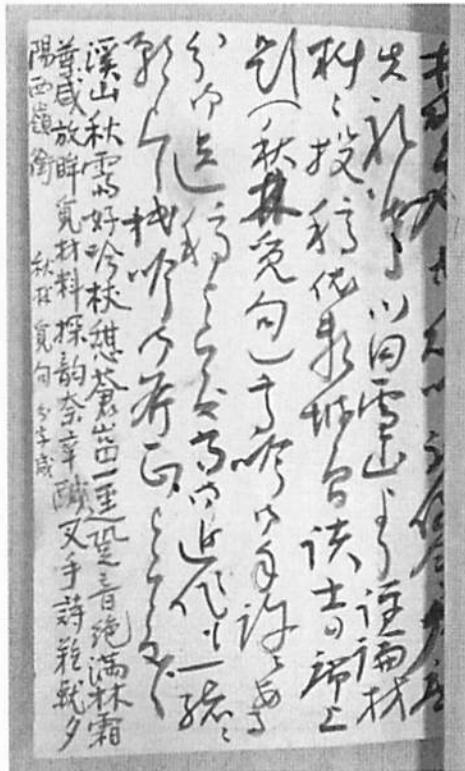
鉄片の葉書の文面は次の通り。消印には「山城／山崎／□(三か)七年九月／九日／二便」とある。

拜啓先日共研吟社詩会欠席
失礼仕候川田雪山より評論材
料に投稿依頼越候間諸士の席上
題(秋林寛句)高吟御手許にある
分御送稿被下度尚御近作も一緒に
願上候拙吟御斧正被下度候

〔図1〕



〔図2〕



溪山秋霽好 吟杖憩蒼巖 一逕登音絕 滿林霜

葉咸 放陣覓材料 探韻奈辛賦(賦カ) 叉手詩難就 夕

陽西嶺銜 秋林覓句分子咸

要件は、川田雪山から「評論材料」に投稿するよう依頼があるので、会員の席題詩と聳山の近作を送ってくれというものであり、自作の五言律詩「秋林覓句」一首を書き添えている。17-15が他と違つて草稿のままなのは、消書を鉄片に送ってしまったからかもしれない。

ここに出てくる川田雪山とは、川田瑞穂(一八七九—一九五二)であろう。高知県出身の漢学者で、雪山はその号である。早く大坂に出て山本梅崖に学び、大正十二年には大東文化学院の設立に尽力して同教授に、のち昭和四年に早稲田大学の教授になった。国分青崖に詩を、松平天行・牧野藻洲に文を学び、司法省、内閣官房の囑託となり政府文書を起草、終戦の詔にも関わった人物である。著に『詩語集成』『帰展日誌』『雪山存稿』二巻などがある(注8)。

この葉書は、乙訓漢詩壇が地方で閉じられた活動をしていただけではなく、漢詩を通じて全国的な繋がりを示していたことを示しているのである。

5 おわりに

以上、三回にわたり、正木彰家文書の詩稿の中で共研吟社・喫求吟社関連のものを調査し、乙訓漢詩壇の一斑を述べてきた。

拙稿でとりあげた詩社の詩稿以外にも正木彰家文書には聳山個人

の詩稿が数多く遺されている。栗園以外の宇田家の人々や中山先春の詩稿も現存しており、地元の人々によって解説作業や勉強会が進められていると聞いている。拙稿がなんらかの役に立つことを願っている。

また、長岡京市の西山浄土宗総本山光明寺の機関誌「信仰の友」に漢詩の投稿欄があり、聳山を始めとする乙訓漢詩壇の人々の作品が多く収められていることも確認した。こういった宗教雑誌は見逃ごされやすいが、近年データベースも整備されつつあり、今後調査すべき対象になるだろう。

地方詩壇の詩人たちはしばしば群小詩人と称されるが、その土地ならではの珠玉の一首が地元の人々によって発見されることもある。中央に出て詩人として華々しく活躍するわけではなく、家業を大切に、余暇に自らを高めようと文雅に励むのも文学との一つの関わり方である。

今回もまた別表にその情報を付した。多くの研究者と地元の人々の調査・利用を願っている。

注

- (1) 新編法字「長岡京市正木彰家文書の詩稿について」(『上方文藝研究』第十号、平成二十五年六月十七日)、同「長岡京市正木彰家文書の詩稿について」(『上方文藝研究』第十一号、平成二十六年六月二十七日)。
- (2) 多田吉宏家所蔵。向日市文化資料館平成二十五年展企画展「向日里人物志」の世界——近世乙訓の文化サロン——において展示された。内容については同企画展図録参照。

(3) 向日市文化資料館所蔵。

(4) 日浅忠行・吉野(旧姓宇田)容子「わたしの見つけた宇田家の人たち」(乙訓地名辞第二輯刊行記念文化講演会、平成二十六年二月二十二日於長岡京市中央生涯学習センター)による。

(5) 平成二十五年、長岡京市で行われた古典の日制定記念文化講演会の会場である長岡京市立図書館に展示された。翻字は長岡京市教育委員会文化財係専門員(当時)百瀬ちどり氏による。

(6) 長岡京市史編さん委員会編「長岡京市史」本文篇二(第四章 第二節 三 自由民権思想の受容と踏襲) 平成九年刊。

(7) 吉川民二「乙訓郡誌」乙訓郡誌編纂会 昭和十五年。

(8) 近藤春雄「日本漢文学大辞典」明治書院 昭和六十年、山田敏之「終戦の昭書資料で読み解く二つの疑問」(「国立国会図書館月報」五九三号 平成二十二年八月)。

〔付記〕貴重な資料の閲覧・掲載を許可していただいた長岡京市教育委員会に感謝申し上げます。調査に際してご助言賜りました長岡京市教育委員会(当時)の馬部隆弘氏、多くの貴重なご教示を賜りました京都西山短期大学の百瀬ちどり氏、向日市文化資料館の山中美緒氏に記して御礼申し上げます。

(いにいな のりこ/佛教大学・非)

○今号に掲載した論考は、計6本である。福田論文は、日本女子大学が入手した「大和八条村孝子聞書」(写本)を紹介し、同系列異本との比較を通して成立順に関する仮説を提示する。神谷論文は、内藤記念くすり博物館所蔵の「常元寺宛蜀山書簡」を中心に、享和元年十二月の太田南畝の状況および心境を、「私事」「公務」「蕪葭堂との交流」の面から検討する。

○有澤論文は、山東京伝作の黄表紙「唯心鬼打豆」(寛政四年刊)の一場面(娼屋の場面)が「雨月物語」「夢窓の鯉魚」をヒントにして成立された可能性を指摘し、京伝の同作品が泉鏡花にも参照された蓋然性にも言及する。加藤論文は、京都の書肆・吉田四郎右衛門による出版物の年表を提供し、同書肆の出版物の特徴を江戸前・中・後期に区分して述べたものである。

○高松論文は、林銆主の三十八歳のときから没年あたりまでの足跡を年代順でまとめたもの。秋成の狂歌集への銆主序文などから、高雅な詠風を尊重する彼の狂歌観が其淵の和学に通ずるところがあることにも言及している。新稲論文は、本誌第十・十一号に掲載された論考に続いて、京都府長岡京市の正木彰家文書の時稿についての調査報告であり、とくに、乙訓漢詩壇の人々の活動内容を取り上げたものである。

○「上方文藝研究」の購読会員・執筆会員(同人)になりたい方は、下記事務局まで郵便またはメールでお申し込み(お問い合わせ)下さい。購読会員の年会費は千円です。年一回刊行の本誌一部(送料は当会負担)をお送りいたします。執筆会員は年会費六千円(学生は二千円)で、本誌二部を配布します。なお、執筆される場合、査読により原稿の採否を決定します。詳細は下記連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。

(康)

上方文藝研究会の会 同人(五十音順)

- | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 浅田 徹 | 天野 聡一 | 有澤 知世 | 飯倉 洋一 | 一戸 沙 | 伊藤 達氏 |
| 今井 亮輔 | 内田 宗一 | 海野 圭介 | 大橋 正叔 | 岡島 昭浩 | 尾崎 千佳 |
| 岡部 祐佳 | 加藤 弓枝 | 神谷 勝広 | 川崎佐知子 | 川崎 昭志 | 川端 咲子 |
| 神作 研一 | 康 盛国 | 木越 俊介 | 衣笠 泉 | 金 昌哲 | 楠川 和輝 |
| 合山林太郎 | 近衛 典子 | 島津 忠夫 | 程 瑜莉 | 神明あさ子 | 菅 宗次 |
| 勢田 道生 | 高橋 清久 | 高橋 雅彦 | 高濱 海穂 | 高松 亮太 | 富田志津子 |
| 中井 陽一 | 仲 沙織 | 水野 仁 | 新稲 法子 | 根来 尚子 | 野澤 真樹 |
| 橋本 孝成 | 服部 仁 | 浜田 泰彦 | 廣川 和花 | 福島 理子 | 福田 安典 |
| 正木 ゆみ | 真島 望 | 松原 秀江 | 宮川 真弥 | 宮本祐規子 | 盛田 帝子 |
| 矢田真依子 | 山崎 淳 | 山田 昇平 | 山本 和明 | 米谷 隆史 | 笹田 将樹 |
| 鷲原 知良 | | | | | |

上方文藝研究 第十二号

平成二十七年(二〇一五)年六月二十四日 印刷
平成二十七年(二〇一五)年六月三十日 発行

編集・発行 上方文藝研究会

〒五六〇一八五三三 豊中市待兼山町一―一五
大阪大学文学研究科日本文学国語学研究室

Tel 〇六一六八五〇一五一一

kamibanken@gmail.com

郵便振替 〇〇九二〇一四一―一三〇四一〇(上方文藝研究会)
印刷 株式会社 ケーエスアイ